



今回は[土佐から天下を夢見た男の城]というテーマで、長宗我部元親の話を書きました。今回は長宗我部氏が滅んだあと高知に入府した山内一豊を追いかけてみたいと思います。司馬遼太郎の『功名が辻』では一豊と千代の立志伝が書かれていますが、小説の中では肝心な時には千代の機転で一豊が功名をあけて出世していくストーリーで盛り上げられています。さて本題に入ります。一豊は15歳の時、父の山内盛豊が織田信長との内紛に巻き込まれ、この争いで父親と兄を失いました。そして幼いながらも一家の長となり、母や幼い弟、妹と共に、流浪の日々を送ることになったのです。一豊は20歳を過ぎた頃、諸事情があり、かつて父の宿敵だった織田信長の配下となっていました。織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍が戦った「姉川の合戦」では一豊は木下藤吉郎に従って参戦しました。

撤退する朝倉勢と凄まじい戦いを繰り広げ、一豊は敵の放った矢が顔面に命中し、深手を負いながらも相手を組み伏せ、見事その首級を上げたのです。討ち取った首は、織田信長の首実検に供され、この功績により一豊は現在の長浜市に400石を与えられました。

1577年(天正5年)に織田信長は、中国地方の大々名「毛利氏」を討つため、中国征伐を開始。一豊は、その指揮官となった「羽柴秀吉」の直臣として、多くの合戦に出陣していきます。中国各地を転戦しながら、数々の武勲をあげていきました。



長浜城 滋賀県

天正10年、「本能寺の変」により織田信長が倒れた後、羽柴秀吉は織田家の重臣であった「柴田勝家」と対立しました。一豊は、秀吉軍の武将として「賤ヶ岳の戦い」に参戦。秀吉は柴田軍に勝利した勢いで、柴田勝家を北ノ庄城に追い詰め滅ぼしました。これにより秀吉は織田信長の実質的な後継者となりました。一豊は数々の活躍が認められ、ついに2万石の大名として長浜城(現在の滋賀県長浜市)の城主へと出世したのです。

次に豊臣秀吉は天下統一を目指し、北条氏を討つことを目的に「小田原征伐」を行います。



掛川城 静岡県

一豊は「豊臣秀次」を総大将とする軍勢に加わり、北条氏が本拠とする「小田原城」の支城「山中城」を落城させることに成功。ほどなく小田原城も陥落し、ついに豊臣秀吉の天下統一が実現しました。戦後の知行割りで一豊は、豊臣秀吉から掛川5万石を与えられることになり掛川城主となりました。

関ヶ原合戦の直前、石田三成は東軍の武将の妻を人質としました。自害をも決意していた妻の千代から、家康に忠誠を尽くすべきことを書いた密書と文箱が陣中の一豊のもとへ届きました。一豊は封を解かず、これを家康に献上すると箱の中には三成陣営に属する増田長盛、長束正家が連名した大阪方への勧誘状と妻の添え状でした。妻を失う覚悟で家康への忠義を誓い、しかも開封せずにそのまま手渡しという行為で、一豊は家康に忠誠を誓ったのです。密書を見た家康はついに決断し、小山にて評定を開いて諸将の意見を聞くことにしました。

評定の席上で一豊は、西に進軍する途中にある自分の掛川城と兵糧をすべて家康のために提供すると公言しました。これにより一気に諸将の結束が固まり、参加していた豊臣恩顧の武将も家康に味方する流れとなりました。関ヶ原の合戦の後の論功行賞を検討した時、家康は「山内一豊の忠節は木の本、其他の衆中は枝葉の如し」と評価しました。一豊の行為が家康の心の奥深くに刻まれていたことが分かります。こうして家康が天下統一を成し遂げた後、一豊は土佐20万石の大々名へと拔擢され、念願の一国一城の主となったのです。



浦戸城址碑 高知県

慶長6年(1601年)、一豊は掛川から土佐の浦戸城に入城する予定でした。しかし、土佐では旧藩主の長宗我部盛親が関ヶ原で西軍に付いたため、帰国を許されないまま改易とされました。「一領具足」と呼ばれた半農半兵の長宗我部家の旧臣は浦戸城の引き渡しを拒否、旧藩主に旧領の一部を与えてほしいと要求して浦戸一揆を起しました。しかし、一揆方は鎮圧され首級を273も失いました。やっと浦戸城の接收が完了し一豊は入城することができました。不穏分子を一掃するため、入城の祝賀行事と銘打って桂浜で相撲を興行し、国中から選手を招き、大勢の見物人も集めました。

一豊は浦戸一揆に関係していた一領具足や庄屋73人を捕まえて浜辺で見せしめとし、磔にしてみました。また、土佐藩内で掛川城主時代までの家臣を上士、地元土佐の郎党・地侍を郷土とする郷土制度を施行しました。旧長宗我部の家臣は、郷土にされ差別的待遇を受けたかもしれません。

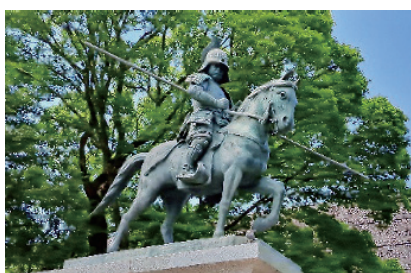


二の丸から見た詰門と天守



天守から見た城内

そののち、高知城は1601年(慶長6年)から10年かけて、一豊によって築城されました。一度は大火によりそのほとんどが焼失した高知城ですが、1753年(宝暦3年)には、ほぼすべてが再建されています。天守も本丸御殿も江戸時代から現存しているのは高知城のみです。



高知城にある山内一豊の騎馬像



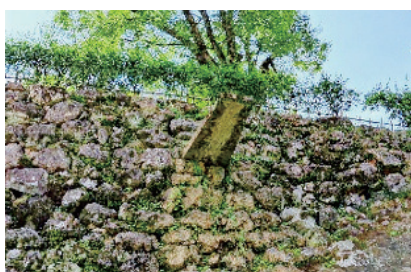
千代の銅像



一豊の出世に欠かせないのが、千代による内助の功です。逸話の中でよく知られているのが、名馬購入の話です。織田家の馬揃えのために馬を探していた一豊は、今まで見たこともないほどの素晴らしい駿馬に出会い、手に入れたかったのですがとても貧しかったので手が出ませんでした。帰宅して落ち込む夫を見た千代は、鏡箱から黄金10両を取り出し、一豊に渡しました。それは千代が嫁入りの際に親から預かった大切な持参金でした。この金で馬を購入できた一豊は、馬揃えの時に織田信長の目に留まり、出世のきっかけを掴んだといわれています。



本丸御殿と天守
大手門と天守



土佐は雨が非常に多いので、高知城には排水用の「石樋」が設けられ、石垣を守っています。



天守の下には、防御として狭間と石落としの他に忍返しなど、さまざまな仕掛けがされています。



三ノ丸の高石垣と天守

山内一豊は戦国時代の荒波の中で千代と力を合わせ上手に生き延び、立身出世し大々名になったのでした。その後、明治まで16代の藩主が土佐を守りました。ただし、第15代の山内容堂の時にはペリー来港・將軍継嗣問題・安政の大獄など大きな波が押し寄せ、第16代の山内豊範の時に大政奉還から明治へと時代が急激に転換し、高知城は廃城となりました。幕末の土佐藩では下士(郷土)の人たちが活躍しました。長年の積もり積もった不満・偏見などが強烈なエネルギーとなって爆発し、幕府を倒し維新による新しい時代へと飛び出したのだと思います。尊王攘夷から討幕、徳川幕府から明治政府へと目まぐるしい時の流れがありました。一豊と千代は雲の上から何を思い領国の人たちを見ていたのかなあ？ 頓首